

## 後期ボードリヤールのポストモダン情報社会論のメディア論的検討

信州大学 水原俊博

## 1 目的

本報告では、2007年に他界したフランスの思想家ボードリヤールの後期の著作、つまり、「後期ボードリヤール (the later Baudrillard)」を「ポストモダン情報社会論」として捉え、それをメディア論の視点から検討し、評価、位置づけることを目的とする。ボードリヤールの理論的軌跡は、おもに文芸批評を執筆した初期、消費社会論 (消費の応用記号論的研究)、シミュレーション論からなる中期、透明性、不可能な交換、悪、無など独特の概念を用いて思想を展開した後期にわけられる。これまで、日本の社会学界では中期の消費社会論、シミュレーション論について、海外の研究に劣らぬ優れた研究成果をあげてきたものの、後期の著作についてはほとんど検討されてこなかった。こうしたことから、本研究ではこれまで、独特の概念や奔放な叙述を特徴とする後期の著作を吟味し、(1) 社会的領野の实在からの乖離と相互浸透、(2) 社会的領野の情報への徹底した変換、(3) 悪による情報システムの攪乱という3段階からなるポストモダン情報社会論として、後期ボードリヤールの社会理論を捉えることを提案してきた (水原 2014)。

## 2 方法

本報告では、上述した取り組みを踏まえ、既存のメディア論、とりわけ、後期ボードリヤールと同時期に問題意識を同じくした社会理論家、たとえば、ボルツのメディア思想史やヴィリリオの情報社会に関する考察を参照して検討することで、ポストモダン情報社会論の独特な概念を社会的に明確化し、そのメディア論としての特徴や問題点を明らかにすることを目指す。

## 3 結果

紙幅の都合で具体的な内容については詳述できないが、こうした取り組みをとおして、たとえば、後期ボードリヤールのポストモダン情報社会論における悪による情報システムの攪乱の矛盾する2つの効果について、理解が深まるものと思われる。ボードリヤールによれば、实在から乖離した社会的領野は情報に変換され、社会生活が高度に情報システム化してもなお、悪 (暴力、病い、他者性など) は情報システムにおいて透明化して不確実に発生し、ウィルス的に拡散することで、情報システムは不安定化、危機に陥る一方、こうした事態は情報システムの暴走を抑止し、情報システムは悪を自身の糧とするという。こうした見とおしの難しい議論を社会的に理解するためには、たとえば、ボルツによるカオスに関するメディア思想史は有力な手がかりとなるだろう。

## 文献

- Baudrillard, J., 1990, *La transparence du mal: Essai sur les phénomènes extrêmes*, Paris: Galilée. (=1991, 塚原史訳『透きとおった悪』紀伊國屋書店.)
- , 1995, *Le crime parfait*, Paris: Galilée. (=1998, 塚原史訳『完全犯罪』紀伊國屋書店.)
- , 1999, *L'Échange impossible*, Paris: Galilée. (=2002, 塚原史訳『不可能な交換』紀伊國屋書店.)
- , [2001] 2002, *L'Esprit du terrorisme*, Paris: Galilée. (=2002, 塚原史訳『テロリズムの精神』『環』8: 37-49.)
- , 2004, *Le pacte de lucidité ou l'intelligence du mal*, Paris: Galilée. (=2008, 塚原史訳『悪の知性』NTT出版.)
- , 2007, *Pourquoi tout n'a-t-il pas déjà disparu?*, Paris: Herne. (=2009, 塚原史訳『なぜ、すべてがすでに消滅しなかったのか』筑摩書房, 9-47.)
- Boltz, N., 1992, *Die Welt als Chaos und als Simulation*, München: Wilhelm Fink Verlag. (=2000, 山本尤訳『カオスとシミュレーション』法政大学出版局.)
- 水原俊博, 2014, 「後期ボードリヤールの社会的検討」『信州大学人文科学論集』1: 93-103.
- Virilio, P., 1993, *L'Art du moteur*, Paris: Galilée. (=土井進訳『情報エネルギー社会——現実空間の解体と速度が作り出す空間』新評論.)